

28. <火山で溶けた下水道>

火山シリーズ第2話、もう20年以上も前のお話です。

ある日、勤務先の本社援助課に連絡が入りました。「2年前の事後点検の時に、初沈の掻き寄せ機の金属部の消耗が早いので不具合に上げた。問題ないので様子を見てくれと言われたので、そのまま使っていたが、どう見ても減りが早いので何とかしてほしい。」というような主旨でした。送られてきた写真には、歯の部分が花びらのように薄くなった掻き寄せ機の池上のスプロケットが写っていました。課員一同「これはひどい！硫化水素腐食のようだ」、「原因は・・・市内の鹿児島温泉？、鹿児島ラーメン？、焼酎製造？・・・」。援助課長の即断で、市と合同の緊急調査を実施することになりました。

処理施設は2重覆蓋で、外見はコンクリート造の立派な建屋でしたが、中に入ったら唾然としました。脱臭ダクトは赤錆で汚れ開閉器の金具が脱落し、コンクリート床のあちらこちらには雨だれの痕のように点々と穴があき、覆蓋の隙間からは硫黄の黄色い粉が噴出し、見るも無残な状況でした。さらに、点検のために空にされた最初沈殿池の内部は、越流堰上部側壁が数センチの厚さで全面的にえぐれており、最初沈殿池の底部床面には水抜き後に滴り落ちた強酸性の結露水でできた深さ1センチもありそうな穴が何箇所もありました。

処理場の現地踏襲結果を踏まえ、水質班と管路班に分かれ、管きょ踏襲調査、管きょ内水質の通日調査などを行いました。水質測定の結果は、水温が特別高いわけではなく水質の異常も認められませんでした。管きょは、汚水が滝落としになっている箇所や処理場付近ではかなりコンクリート腐食が進んでいました。マンホールを開けるたびに空気がよどんですえた感じの匂いがし、酸素濃度計の警報ランプが度々点滅するのも気になりました。市職員の話では、「桜島の火山灰が下水道に侵入すると浚渫が大変なので、灰が入らないようにマンホールの穴は皆塞いだ。」ということでした。「以前臭気の苦情があったので、管きょの途中に臭突を設けて活性炭脱臭を行っ

たことがあるが、2、3年で金網ごと落ちてしまった。」という話もありました。

現地調査を総合した結論は、最初に予想した「温泉、鹿児島ラーメン、焼酎製造」は全て外れ、「幹線工事の遅れなども原因の一つにはなるが、処理場を溶かした最大の犯人は“桜島”」ということでした。その後、調査報告書のまとめや財政部局との調整やらで決着までには時間がかかりましたが、最終的には自治体のご要望に沿った形で解決することができました。もっとも、この合同調査が終わる頃には、毎晩の打上げ会の焼酎で疲れも溶け、脳みそも溶け、気持ちの齟齬もすっかり溶けていたように記憶しています。

恐らく、JSの防食対策の出発点になったであろう昔々のお話でした。

< 川口 幸男 >

※No. 32号(2004/9/9)に掲載